

## まごころ

倉 橋 惣 三

教育の心こそまごころである。その子のために眞實におも  
う心、その子のためというも、便宜の幸福にとどまらず、そ  
の子を、眞に人間として尊重するがゆえの心、このまごころ  
なしに教育はない。

教育はいろ／＼の目的を以て行われる。しかし、目的が教  
育ではない。目的は教育を行つてゆくためであり、つまり  
は、教育の結果としての、望ましいあれこれの期待である。  
が、それらの目的が教育そのものではない。その子への教育  
の心先ず動いて、期待が起り、目的が定められるのである。  
その教育の心はその子へのまごころから發する。目的のため  
のまごころでなく、まごころあつての目的であることを考え  
ちがいはしてはならぬ。

教育にはいろ／＼の方法がある。しかし、方法が教育その  
ものでないことはいうまでもない。方法は、だてであり、教  
育の具に過ぎぬ。教育の具も亦大切である。それなしに教育  
の目的は達せられないであらう。が忘れてはならぬ。具は主  
あつての具である。教育の主は教育の心、すなわち、その子  
へのまごころである。まごころが方法を用うるのである。

なんのため、なんのために教育しなければならぬといわれ  
る。しかし、その子のためにしなければならぬまごころなし  
に、目的はたゞこれ、望ましいよきことである。どうして、  
こうして教育するという、その方法が選ばれるのは目的のた  
めであるが、その子のためまごころなしには、方法は單な  
る方法である。單なる目的と方法が教育そのものでないこと  
はいうまでもない。たとえば、健康が目的として重んぜられ  
る。しかし、健康そのことは必ずしも教育の目的だけのこと  
ではない。その子の健康が目的とせられる時教育になる。或  
はまた、自發が方法原理として重んぜられる。しかし、自發  
そのことは生命の心理である。その子の自發が重んぜられる  
時、教育になる。いずれにしても、その子への心が先決であ  
り主動である。その子への純眞熱注の心、これまごころであ  
り、そのまごころなしに教育そのものはないというのであ  
る。従つて、目的が如何に明かにされ、その必要が信ぜら  
れ、方法が如何に考究せられ、その技術が守られても、それ  
だけでは教育そのものでないことがある。それが眞に教育で  
あるか否かは一つにまごころにあるといえる。

目的なしには教育は迷う。方法なしには教育を誤る。深き用意を要する所以である。けれども、まごころなしに目的に熱なく、方法に力のないのは、それ以上に嚴かな教育の事實である。或は、目的は人に示され、方法は人に教えられても存在し得るかも知れない。しかし、まごころは、その子への私の心であり、私のその子への教育は、こゝにのみ存在する。教育ほど、人に頼まれたゞげや、人を真似るだけで出来ないものはない。要は、どれだけ眞にその子のためを思い念ずるかにある。

教育の心としてのまごころを愛といつてもいい。昔から最も貴い意味において用いられている言葉である。眞の愛は、つまり、その子への私の眞實にほかならない。しかし、わたしたちの愛には、さまざまの場合がある。氣分に止まる場合がある。まごころではない。氣分や好感には、多分に我を樂しませているところがある。彼を樂しませることによつて我を樂しませ、我を樂しませるために彼を樂しませることさえある。必ずしも咎むべきでないとしても、まごころとは全く別であり、まごころと相反することもないといけない。極言すれば、そこには一味のたわむれどころが、ちら／＼しないと見えなからである。まごころは、すなわち教育の心は、本氣である。假りにもたわむれ心でない。

少くも、愛がすべて教育になるとは限らない。時として

は、教育の反對になることさえある。愛には自ら溺れ、相手を溺らす傾きもある。更にその溺れを快しとするところさえある。反教育たらざるを得ない。

まごころは、どこまでも相手のためを主とする。我れを忘れ、我れを苦しめて顧みないのはその故である。教育の志我は、藝術の志我とは異つて、教育三昧に我れを忘れるのでなく、ひたすら相手のために我れを忘れるのである。教育の苦勞は修業の苦勞とは異つて、教育精進に我を苦しめるのでなく、専ら相手のために我を苦しめるのである。教育の心としてのまごころは、かたときも相手を離れない。教育の熱心や興味は、往々にして、教育することの仕事としての熱心や興味に止まつて、肝心の相手を離れることのあるのは、まごころの乏しい爲である。

まごころは、相手に即して行き届く。幼児の教育者が、所謂教育と形のちがう世話に周到なものもその爲である。相手を離れて世話はない。相手に即けば即くほど、世話はこまかに懇になる。教育と名のつくほどでもない、こま／＼とした身邊の世話がせずに行られなくなる。若し、幼児保育者として、幼児の世話に行き届かないものがあつたら、まごころが足りないのである。

まごころは、相手のためにいちずである。幼児の教育者

が、所謂やさしい許りでない厳しさを示すことのあるものもその爲である。相手のために深く思うところに、厳しからざるを得なくなる折々がある。厳しいことは自らに楽しいことではない。決して快いことでもない。それを敢て厳しからざるを得ないのも、相手のための眞實からである。幼児教育者が幼児を叱るのも、その眞實以外の何ものでもない。まごころが無かつたら、うち捨て、笑つてもいられるのを、どうしてもそうしてはられないところに、厳しい叱りの言葉も、時として叱りの手さえ出る。それは教育の仕方の理論としていゝことではないかも知れないが、やむにやまれぬまごころであれば貴い。幼児も亦、その叱り方ではなく、そのまごころに感動されずにいないであらう。

まごころは、自分を相手のものとする。幼児教育者が、厳しいこともある以外、いつも相手の相手になりきるのには、その爲である。いつしよに、というよりも一つになつて、幼児と共に遊び、うたい、殊に心から話しあうことは、教育の方法としてだけで出来るものではない。まごころが、幼児のひと言をも、おろそかには聞き流さないのである。その言い足りない言葉の中にある幼児の心もちに、正しくこたえすにいられないのである。ほんとうに幼児に、話せるためにも、まごころがなくてはならぬが、(なんとまごころの缺けている話手のあることだろう)、ほんとうに幼児と話せるためには、まごころなしには決して出来ない。(まごころの缺けたらわの

そらにも近い話相手をすることの、わたしたちになん多いいことであらう)。

子どもは常にまごころである。その點で、幼児を侮つてはならぬ。子どもは常にわたしたちのまごころに敏感である。その點で、うつかりしてはならない。

それにしても、わたしたちのまごころの足りなさが、如何に子どもたちを失望させていることだろう。

失望させるだけなら、まだ責が浅い。まごころへの失望を重ねている間に、子どものまごころそのものを、うすらげ、弱め、次第に失わせてゆくかも知れない責に至つては、教育者としては罪である。人間の貴さは、いろ／＼に數えられる中にも、まごころを以て第一とする。そのまごころを失わせて、なんの教育があらう。一切の他の教育の効果は、その非教育の爲に、うち消されて仕舞うといつてもいゝ。

その反對に、まごころを育て養ひ強められるのは、まごころに觸れるほかにない。わたしたちの小さいまごころも、そのために大きな力をもつ。但、まごころを教育するためのまごころではない。そんな効果意識は、もうまごころでなく、識らないまに行われ、いつとということなく、子どもの心に觸れてゆく。そうして、元來がまごころの持主である子どもを、更にまごころの人間にしてゆく。しかも、それが、幼い子に對する時ほど著しい。